



ウィーンの 音楽教育



家庭で楽しむための音楽、それが一番自然な姿だ

早期教育の是非

日本では、ピアノとヴァイオリンはかなり幼少の頃から勉強を始めないと、将来専門家になるのはとても無理である、というのが世間一般の通説となっている。

人間の聴力の発達が一番著しいのが3〜4才ぐらいの幼時である事、そして楽器を演奏するために必要な筋肉なども、なるべく早いうちから訓練を始めた方が、というのがある理由である。確かに科学的な根拠もあるし、勉強はなるべく早いうちに始めるに越したことはない。

今日までの長い歴史のなかで、「神童」と呼ばれるようなすばぬけた才能を生まれ持ち、それこそ年端もいかぬうちから公開演奏をし

ていた音楽家も数多い。中でもモーツァルトはその代表的な例である。

しかし音楽家の才能が幼時における早期教育のみの結果であるか、というと、必ずしもそうとは限らないようだ。また世界中それぞれの国柄もあって、どこでも同じような教育方法がとられているわけでもない。

音楽の都ウィーンの様子を見てみよう。

当地では、一般家庭の子供が小学校に入學する以前に何らかの楽器を習い始める、という例はごくまれである。ピアノを習う、といっても普通は10才前後から、あるいはもっと遅くから始めるのも決して例外的な事ではない。

そればかりか、まだ幼稚園の頃の子供に前もって読み書きを教えようとすると親は非常に少なく、このあたりも早期音楽教育が出遅れる一因といえよう。

それでも才能に恵まれた子供はその後それなりの進歩をとげ、専門課程に進んで音楽大学を卒業する年代になると、まがりなりにもプロとして通用するレベルに近い演奏をするようになる。

教育システムが特別優れているのだろうか？

いや、そんな事は決していないようだ。システムそのものは、日本のものの方がずっと整っているように見受けられる。

日本ではピアノを初めて習う際「バイエル」という教則本を使用する場合が多いが、ウィーンには特にこれといった定行はない。バイエル（これはこの本の作者の名前だが、ウィーンでは「バイアー」と発音する。そうしないと楽譜屋さんで通じない）も売ってはいいるが、日本で手に入るような子供向

けに大きな音符と絵を使用して編集されているようなものは見当たらない。

もつとも子供にとって、日本式の特大音符が果たして本当に必要なものかは、まだまだ議論の余地が残る問題だ。視力の衰えた老人と違って子供はまだ目は良く見えるはず、いかがなものだろうか。

音符が大きいと、一曲仕上げるごとにどんどん教則本のページが先へ進むので子供の励みになる、という利点はあるが……。

これなら間違いがない、といった特別目玉商品の教材もなく、先生がそれぞれの習慣で使用している本を使いながらポツポツとピアノを習いはじめる。ウィーンには市が公費で運営している子供向けの音楽教室が各所にあり、月謝が安い、というのでこの教室に通う子供も多い。

しかし幼時教育において常に問題になるのは親、それも母親の態度である。

ウィーンに限らず全世界どこでも大同小異なのかも知れないが、子供がレッスンでうまく弾けなかったり準備がままならなかったりした場合、付き添いの母親がのうのうと子供の弁護をする場合が非常に多い。「このところ学校の勉強が大変で……」とか「今日はなぜ

か子供がどうも不機嫌で……」とか「また先日の遠足の疲れが残っておりまして……」等々、いらぬ弁解が後をたたない。

子供の育て方に対する考えの根本が違う、と言ってしまうばそれまでだが、教える側の教師としてはなんとも情けない。私の持っている国立音楽大学のクラスの学生にさえ、時々そのようにしやしやりに出てくる親がいる。万事がこんな風だから、ヨーロッパ古来の勢いが最近衰えてきているのかなあ、などと思いたくもなってしまう。

音楽を趣味でやるならばそれでも良いが、専門家になれたらならう、というのである。もう少し根性がほしいなあ……。

まだ海のものとも山のものとも皆目わからぬ子供のために新しくピアノを買い与える気概のある親もあまりいない。おじいさん、おばあさんから譲りうけたペンペンとした音しかでない年代物の楽器があればまだしも、である。ろうそく立てがついていたり、彫刻が施されていたり、家具として美しい楽器であることは確かだが……。

それでもうまくなる子はうまくなる。不思議なものだ。天分とはやはり天の与えるものなのだろうか。